

## 映画で考えるマレーシア女性の教育・結婚

——シンポジウム『女性らしさ』の冒険——「愛しい母」ヤスミン・アフマドの思い出とともに——より——

光成歩

ヤスミン・アフマド監督が2009年7月25日に逝去して2年がたつ。ヤスミン監督の映画をとおした「もうひとつのマレーシア」模索の試みは、次世代の映画人たちにどのように受け継がれているのか。JAMS 連携研究会のマレーシア映画文化研究会は、2011年7月31日（日）、京都の芝蘭会館山内ホールにて、女優シャリファ・アマニ氏（以下、敬称略）と杉野希妃氏（同）をパネリストに招き、「女性らしさ」の冒険——「愛しい母」ヤスミン・アフマドの思い出とともに」と題した公開シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、フォーラム、映画上映、研究報告を通して、ヤスミン監督の試み、すなわち「冒険」がどのように受け継がれているのかを考えた。

プログラムは二部構成で、第一部「マレーシアにおける教育と結婚」では、「マレーシアにおける教育とライフデザイン」（発表：金子奈央）、「マレーシアにおけるイスラムと結婚」（発表：光成歩）と題して研究報告をおこなった。第二部「女性らしさ」の冒険」では、小野光輔氏（和エンタテイメント）による作品紹介による映画『サンカル』の上映と、シャリファ・アマニ、杉野希妃のゲスト両名と山本博之氏によるパネルディスカッションがおこなわれた。

杉野希妃は、韓国映画『まぶしい一日』（2005年）で女優デビューし、2010年東京国際映画祭の受賞作品『歓待』（日本映画・ある視点部門作品賞を受賞）では主演女優兼プロデューサーをつとめた。他方、ヤスミン監督作品のオーキッド三部作でオーキッド役を演じたシャリファ・

アマニは、ヤスミン監督の遺作『タレントタイム』で助監督をつとめ、自らの監督作品も発表し始めている。両者は、ヤスミン監督の次回（予定）作『ワスレナグサ』で共演予定であったこと、それぞれ監督・プロデューサーとして演じる以外の形でも映画に携わっていること、またその活躍の舞台をマレーシア、日本に限定することなく映画作りを行っていることなど、多くの共通点をもつ。

パネルディスカッションでは、ふたりからヤスミン監督との出会いや作品づくりのエピソードなどが紹介された。フロアからの『ワスレナグサ』を映画化しないのかとの質問に、杉野が著作権などの実務的な問題に触れながら前向きな姿勢を示したところ、フロアからは拍手が起こったが、シャリファ・アマニは「ヤスミンから学んだものを別の形で生かしたい」と答えた。この返答は、シャリファ・アマニの、映画をとおしてマレーシアとどう関わるかという姿勢を表しているように思われた。映画によって「もうひとつのマレーシア」、「こうあればいい理想のマレーシア」のあり方を投げかけ、その理解は観客に委ねたいというヤスミン監督の意志を受け継ぎ、シャリファ・アマニもまた、彼女自身のマレーシアを描くことでこの意志に答えようとしているようであった。シャリファ・アマニは、自らを「ヤスミン・ファミリーの長女」と任じ、映画製作をとおした「ファミリー」再結集を「使命」であるとも語っており、パネルにおいても終止、彼女の意気込みと決意が感じられた。

今回がマレーシア国外での初上映となった『サンカル』は、シャリファ・アマニの初監督作品で、マレーシアの「Her Story Films Project」に上梓されたものである。このプロジェクトは、マレーシアの女性たちが経験してきた恋愛、性、希望の多様なあり方を女性の視点から描くことを通して、女性の経験を共有する場／可能性を広げようとする試みである（公式ホームページ <http://www.herstorymalaysia.com/>より）。実話をもとにした『サンカル』では、高校生（Form5）の少年と少女がある結婚により引き裂かれる苦悩と葛藤、そして旅立ちまでの過程を描く。

映画上映に先だっておこなわれた研究報告は、教育と結婚というふたつの社会制度における女性らしさ／男性らしさや民族らしさの表現に焦点をあてた。金子の報告は、国民学校、国民型学校が並列した教育制度のあり方を説明したうえで、統計からマレー人女性の大学進学率が男性に比べて高いこと、すなわち教育制度におけるマレー人優遇の枠組みが、マレー人女性の社会上昇に寄与している現状について紹介した。また、光成の報告は、ムスリムらしさとマレー人らしさが重なり合う社会的文脈のなかで、夫婦＝男女のあり方が規定されていること、他方で「改宗」を経ての結婚という、既存の制度のなかに位置づけられない事例が顕在化していることを説明した。

教育と結婚というふたつの社会制度は、人々が自らの生き方を確立する過程で重大な意味をもっており、映画『サンカル』の主人公たちも、そのなかで自らの選択について苦悶する。こうした社会制度を概説する研究報告と映画上映との組み合わせは、マレーシアの人々をとりまく

制度・社会環境と個別の経験の語りを映画鑑賞をとおして有機的につなげる機会となったように思われる。これは、マレーシア映画をより深く理解するというだけでなく、映画を通じてマレーシアを考えることにも通じるだろう。

シンポジウムの参加者は、ヤスミン・アフマド監督のファンやマレーシア映画のファンだけでなく、マレーシア社会についての情報を求める人や、類似のテーマを研究する大学院生など多様な人々からなっており、本シンポジウムに対する期待や要請も様々だったという感触をえた。シンポジウムでは、映画を観ること、読むこと、作ることへの複合的な視角が提示されたように思う。報告者としては、映画・映像などの地域情報と、地域研究による知見とを組み合わせることで、より広い層の人たちが受け手になりうると実感する機会でもあった。



初監督作品『サンカル』について語るシャリファ・アマニ氏